

祭礼と住居

——山口県防府市大道地区大歳祭におけるお笑い講型住居の形成——

金谷玲子

1 はじめに

地域の特色的な住居は、地域の歴史や風土、慣習と深く係わっており、住居の形は、その家が担う地域の社会的な役割に応じるように作られてきた。地域の特色的な住居の継承は、地域の社会関係、地域固有のものの見方や考え方、暮らし方の継承に密接に係わっていると考える。

住居を対象とした研究には、建物そのものの研究を主体に、建築と社会との関係や建築と環境との関係を考察した研究が、お互いの研究成果を支えあう形で進行している。このような中で筆者の興味関心は、地域の特色的な住居の中でどのような生活が行われてきたかという居住習俗と、住居の形態や空間の意味、役割を知りたいというところにある。

本研究は、山口県防府市大道地区で行われる大歳祭とよばれる祭礼を事例に、人々の生活と祭の関係を住居を通して考察するものである。日本の住まいは、かつては人の住まう空間であり、生産のための空間であり、神と共に人が住まう空間でもあった。神を迎えひと時を村人と一緒に過ごし、再びお送りするという住まい空間の利用の仕方は、今和次郎の示したことである（今 1958: 3-20）。また、日常的な住まいと精霊の交わりは文化人類学的住まい研究で取り上げられている（大河 1986: 58-90）。

大歳祭は集落内の住居で行われる祭で、日常では見せることのない住居を公開して執り行われる。本稿では小俣集落と岩淵集落の2軒の住居を取り上げ、大歳祭の実地調査、聞き取り調査から、当屋を務めるにあたっての心構え、準備の様子を把握し、祭礼と住居の関係について考察する。

2 大歳祭の概要

山口県防府市大道地区は、山口県の南央部、防府市の西端に位置する。大道地区は瀬戸内海にそそぐ横曽根川にそった低地で、主として稲作を営む農家が多い農業地域である。この大道地区に現在 26 の集落が点在しており、大歳祭を行う集落が複数存在している。平成 14～16 年にかけて山口県史編纂民俗部会調査の一環として東畑、西畑、上ノ庄、小俣、岩淵、下津令の 6 つの集落で大歳祭の調査を行った。

大歳祭は江戸時代から継承されている祭で、毎年稲の収穫後である 11 月から 12 月にかけて各集落ごとに行われ、順繰りの当屋で祭を行う。小俣集落の大歳祭は、小俣八幡宮の社伝によると、鎌倉時代の正治元年（1199）から始まったといわれている。現在のように当屋の家で大歳祭が行われる方法がいつ頃から始められたかは不明であるが、各集落には近世後期以降についての記録が残っており、150 年以上にわたり当屋の家で大歳祭を継続

してきたことは明らかである。このことは、住居が祭礼の空間として使用されつづけてきたことを示している。

大歳祭は大歳講の講員によって行われるが、講員は集落の全戸が加入している場合と、特定の家だけが参加している場合とがある。小俣集落と岩淵集落は名（みょう）を持つ講員が執り行う。当屋を務める家では大歳神のシンボルである御室や箱を1年間預かり、大歳祭を主宰し次の当屋に引き継いでゆくという務めがある。大歳祭は大歳神を迎えて収穫の感謝と来年の豊作を占う神事であり、その神事の意味するところは民俗学では畑作民俗との関わりや宮座儀礼における稲種子祭祀との関係が示唆されている¹⁾。

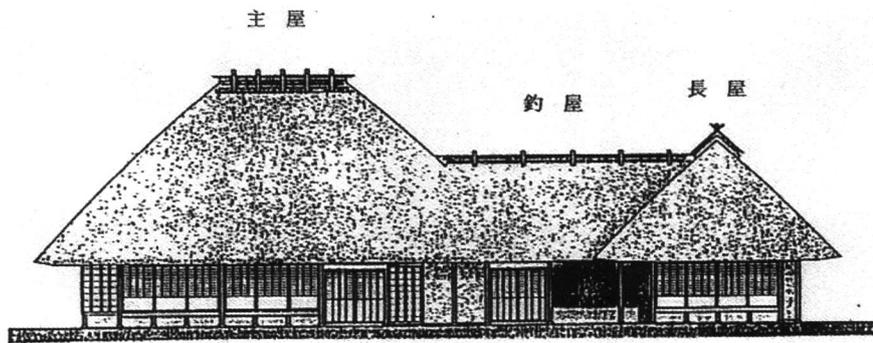
大歳祭は現在でも多くの集落が当屋の家で、南側に面したオモテとナカノマの続き間を祭礼の場として使用し、大歳棚をニワとナカノマの境の鴨居に吊る。大道地区大歳祭の中でも、お笑い講と呼ばれている小俣集落と岩淵集落の祭では、この祭りを行なう部屋の使い方に特徴がみられる。通常、床の間のあるオモテを上座、土間に面するナカノマが下座となるが、お笑い講ではオモテが下座となり、ナカノマに大歳棚が吊られこちらが上座となる。小俣集落と岩淵集落以外の所でも、昔は上座と下座を逆転させていたことから、時代が下がるにつれて祭礼の仕方が変化したと思われる。地元ではこの座敷の位相の逆転を“オオトシザシキ”と呼んでいる。ナカノマが上座になる理由について『防長風土注進案 9 三田尻宰判上』切畑村（山口県文書館 1964: 414-417）に、大歳神は作り神であるので農作業をする土間を上と定めているとある。

また、主屋への出入りは、神主はオモテのエン、講員はナカノマのエン、当屋と手伝いはニワやツリヤの入り口から出入りし、イノマから上り下りする。そして神事が始まるまでは神主はオモテ、講員はナカノマに座っているが、神事が始まる前に神主はオモテからナカノマへ、講員はナカノマからオモテへ移動する。神事が終わるとまた神主はオモテに、講員はナカノマに移動する。神事の際、大歳様が祀られる部屋（ナカノマ）に座ったり出入りするのには、神主と当屋など世話人に限られる。客の講員は立ち入らない。直会の際の座席が決まっており、席に名前がついている。

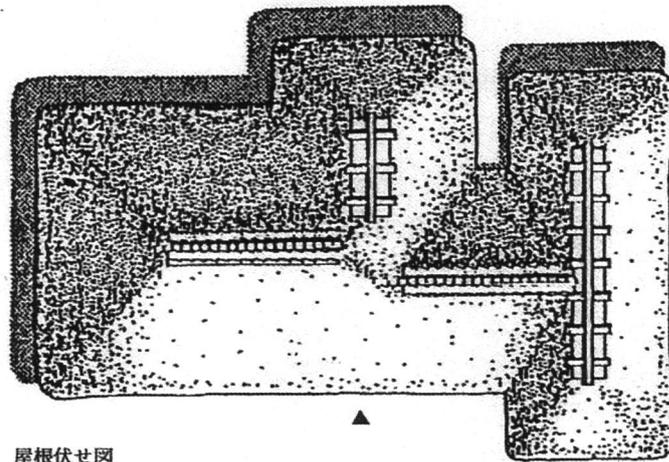
大歳棚の位置、参加者の出入り口の違いやオモテとナカノマの間の移動など、日常の住居の使い方と異なる作法と行動は、今では忘れられつつあるが本来意味が伴うものであった。大歳祭を行うことは、先祖が行って来た大歳祭の儀式を継承することであり、住居の使い方の中にそれが色濃く残されている。

3 大道地区の住居

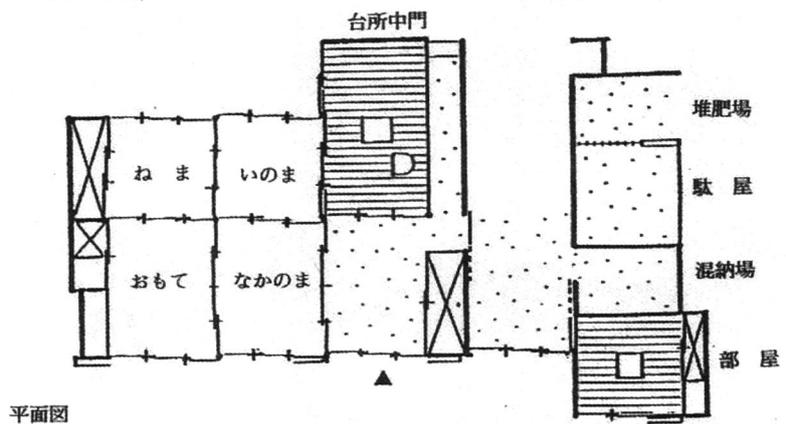
図1は1950年代まで大道地区の位置する山口県の県央部で建てられていた農家の模式図である。下から平面図、屋根伏図、立面図を示し、住居の形は、整形四間取り（主屋の東側に土間、西側に田の字のように四つの部屋を持つ形）の主屋と、その東側に農作業などを行う長屋が建ち、主屋と長屋の間に釣屋と呼ばれる屋根が架かる。山口県の県央部の伝統的な農家はこのような釣屋形式の住居で、大道地区の住居も釣屋形式である。



立面図



屋根伏せ図



平面図

釣屋形式の農家

図1 山口県中央部の伝統的な農家

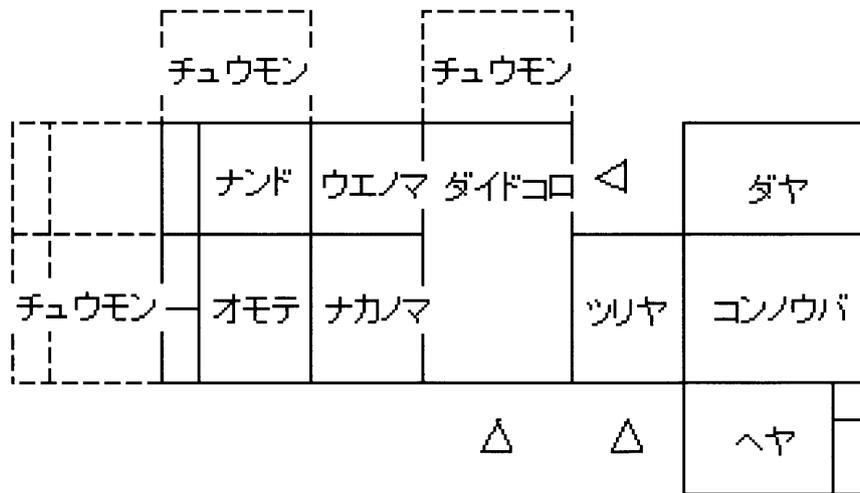


図2 大道地区の農家平面模式図

屋敷構えは、寄棟または入母屋造り平入の主屋を中心に、東に南北に長い長屋が建ち、主屋と長屋の間には釣屋が架かり、主屋の北側や西側に中門（チュウモン）と呼ばれる別棟の客間、北に蔵や倉庫、小屋が建っているものが多い。また、調理場である台所が主屋の東側に別棟になっている家も少なくなく、主屋と別棟台所の上に屋根を架けてフタヤと呼んでいる。主屋の南側の土地はカドニワ、北側をセドニワとよぶ。

図2は大道地区の住居の平面模式図である。間取りは整形4間取りと東西に並列する2間取りが基本の形である。主屋の南側で床の間のある部屋をオモテ、そのニワ側をナカノマやニノマ、北側の奥をナンド、ニワ側をウエノマやイノマと呼ぶ。また基本の間取りにチュウモンと呼ばれる部屋を別棟で持つ家も多い。土間はニワ、ウチニワという。現在ではかつてのニワ（土間）に床を増築し、ゲンカン（玄関）、カッテ（勝手）、ヨウマ（洋間）、ダイドコロなどの部屋を作っている。

4 小俣集落における大歳祭と住居

平成15年に行われた小俣集落のSYさん宅での大歳祭の様子は以下のとおりである。

小俣集落は名（みょう）を持つ21軒の家が順番に当屋を務める。現在参加者は1軒減り20軒で行っている。平成15年12月7日はSYが当屋を務めた。順番からすると平成15年度はYMであったが、都合により平成16年度の当番であったSYが繰り上がって行った。したがって、来当（らいとう：来年の当屋）は不在で今回臨時の役があたった。小俣集落の大歳祭はお笑い講として有名で、防府市の文化財に指定され、毎年テレビ、ラジオや新聞などで紹介されている。

大歳祭の式次の概略は、当屋の家で神事が行われ（写真1）、直会（写真2）でお酒が入

り席が和やかになったところでお笑い講を行い、再び直会の後当屋渡しが行われる。今回は当屋渡し以降の行事が事情により行われなかった。祭の亭主側は、当屋1人、給仕は親戚の男性4人、手伝いにSYの妻、母、娘2人、親戚の女性が携わった。客側は、八幡宮の神主1人、講員は5人欠席で16人出席。これに来賓2人が参加した。

お笑い講の当日は、屋敷地東側の道との境に幟をたて、玄関の前に注連縄が張られた(写真3)。屋敷構えは瓦葺き一部二階のホンヤ、ホンヤの南西に廊下でつながった別棟のチュウモン、西に二階建てのノウシャ(農舎)、北にソウコとシャコ、ホンヤの東に南北に長いコンクリート造一部二階建てのナガヤが建っている(図3)。

祭はホンヤの7畳半のオモテ(①、④の部屋)と7畳半(②、③の部屋)のニノマの部屋で行われ、調理はダイドコロ、配膳と亭主側の控えの部屋はチャノマ、祭りに参会した親戚の控えの部屋にヨウマが使われた。また、給仕の控えの部屋として北西のかどの部屋も使われ、その外に仮の縁台を設え弁当を保管した。南西の別棟であるチュウモンは、来賓や報道関係者の控え、神主の着替えの部屋として使われた。



写真1 土間に向かっての神事



写真2 直会(なおらい)



写真3 幟と注連縄



写真4 大歳棚

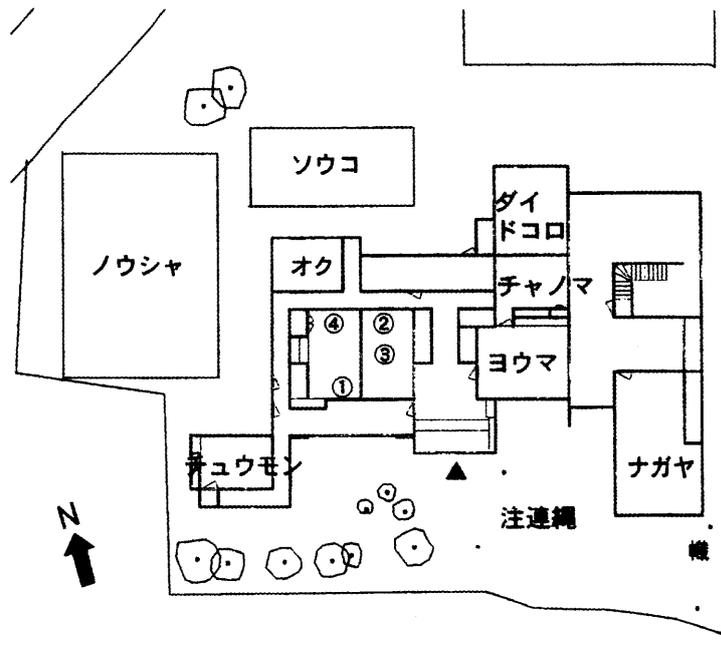


図3 小俣集落の当屋の家

ご神体の入った御室は、ニノマとゲンカンの間の鴨居の上に吊った大歳棚（写真4）に置かれ、その下のニノマに祭壇がつけられた。

次に住居の変化についてSYさんの妻（昭和2年生まれ）の話を紹介する。

小俣集落の当屋は20年に一度のことだから、また祭礼が報道されたり見学者が多く訪ねることから、改築をしたり畳や瓦を新しくする家もあります。私の家は1980年（昭和55年）に建て替えをしました。丁度高速道路の建設で田を手放したのでそのお金が入り、建てられて150〜200年は経っていた草葺屋根の家を解いて新築しました。昭和58年に当屋をしましたが、この時は新しい家で大歳祭を行いました。

藁屋の時は6畳が4部屋の田の字の間取りでしたが、建て替えの時、座敷を大歳祭のために広くし、7畳半の続き間にして土間をなくしてヨウマを作りました。見物人のために続き間の南側には広縁を作り、廻りに廊下を作りました。玄関も大歳祭では大勢の人が集まるので広くしました。チュウモンも建て替えたが、前にも同じ所にチュウモンがありました。ナガヤ、ソウコ、ノウシャ、シャコは前のままです。

5 岩淵集落における大歳祭と住居

岩淵集落は名（みょう）を持つ18軒の家が順番に当屋を務めていた。講員はもとは20人くらいいたといわれるが、現在参加者は減り8軒で行っている。平成14年はNMの長男が帰省し当屋を務めた。祭りの亭主側は、当屋1人、給仕はNMと次男、手伝いに親戚の夫婦1組が携わった。客側は、小俣八幡宮の神主1人、講員6人であった。

屋敷構えは藁葺きホンヤとその東側に南北に長い二階建てのナガヤ（長屋）からなり、ホンヤとナガヤの間にはツリヤ（釣屋）がある。段丘になった集落の最南端に位置し、北西は隣家が建ち、東南は高い石垣の下に田が広がっている（図4）。

大歳祭の式次の概略は以下のとおりである。早朝に当屋以外の講員が大歳森に集まり、竹を刈り、垣を作るシモケシといわれる共同作業を行う。当屋の家ではニノマ（②、④、⑥の部屋）のエンの外に幟を立て（写真5）、御室の置いてある大歳棚にせいごを吊す（写真6）。御室の扉を少し開け、塩と御神酒を供える。講員は幟の間を歩いてニノマのエンからニノマに上がり、神主と当屋はオモテ（①、③の部屋）に座す。講員はニノマからオモテへ移動し、大歳棚に向いて座る（写真7）。神主はニノマに座る。当屋のホンヤで神事が行われ、直会（写真8）の後、当屋渡しが行われ、ご神体の入った御室や幟を持って来年の当屋である来当の家へ移動する（写真9）。

祭りはホンヤの6畳のオモテと6畳のニノマの部屋を使って行われた。また、調理はダイドコロで、配膳はイマ（イノマ）で行われた。ご神体の入った御室は、ニノマとゲンカンの間の鴨居の上に吊ってある大歳棚に置かれている。大歳棚の下に祭壇として応接台が置かれる。



写真5 ニノマの入り口の幟

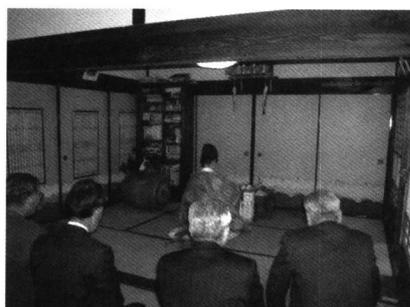


写真7 土間に向かったの神事



写真6 大歳棚



写真8 直会（なおらい）



写真9 当屋渡し

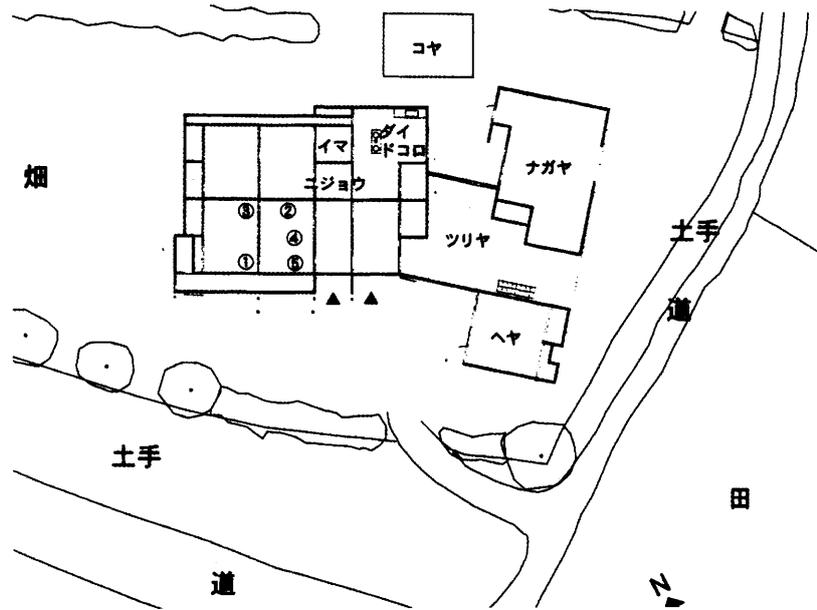


図4 岩淵集落の当屋の家

次に岩淵集落の人々の生活と大歳祭の関係について、平成17年の当屋を務めたTさんの妻（昭和24年生まれ）の話を紹介する。

大歳祭は大体20年おきに当屋の当番が回ってきますが、気持ちとしては当屋が終わった段階でもう始まっているという感じです。具体的には2年ぐらい前から、当屋がそろそろくるね、やらなきゃいけないね、大工さんにはいつ入ってもらおうかという感じでした。1年前に、大工さんが2月の節分が過ぎたら土地や建物をいらつてもいいということで、2月3日から1ヶ月間、うちは田の字の間取りで4部屋を祭で使うようになるのでそこに手を入れました。床が落ちたら恥ずかしいから床下の補強とふすまの張り替えと修繕、壁の塗り替えをしました。夏が終わったら畳の表替えをする予定です。

また、土間を床下にしてリビングをつくり、それに続く台所も一緒に天井をあげて昔の梁を出してもらいました。これで食事を運ぶのに上り下りしなくて楽になりました。それと大歳祭の見物人は廊下に立つので、廊下をふさいでいた階段を取り除きました。

大歳祭は長い人生の中の節目にはなりますよね。それがあのおかげで家を保てる。綺麗にしようかという気にもなります。それがなかったら、子供もいなくて2人だったら、もういいやこれですって感じになるんじゃないかと思います。わざわざこんなに綺麗にしなくても住めばいいわってね。だから大歳祭はいいといえればいいけど、でも大変だなとも思います。

最近はやっぱテレビ局とかがこられるのが苦痛になりますね。前はなかったです。そ

んなのが入ってこられることによって、やっぱり何ですか、見栄ですか、綺麗にしようとか、しとかなきゃとかいうのがありますね。

20年に1度の当屋のサイクルが、生活の節目のような役割をしており、住居の維持もこれに合わせて行なわれていた。報道されるようになると、多くの見物人のために新たな家の手直しが必要になり、それも祭礼の継承の中に組み込まれていることが分かる。

6 結語

大歳祭は主屋の4つの部屋のうち、南側のオモテとナカノマの続き間で行われる神事である。そして通常上座であるオモテではなくナカノマを上座にするなど、いつもと違う出入りの仕方や部屋の使い方をすることにより、非日常の空間を演出している。その方法は当事者だけが知り得る方法で、また代々言い伝え継承されていくものである。住居は家族や親族、集落の中の結束を強めるための舞台であり、安寧な生活を実践する場であると考えられる。

このように祭礼を受け継いでいくことは、祭礼の場である住居を受け継いでいくことにほかならない。大道地区の大歳祭は、見えない神、稲の神を家に招いてもてなし、満足してお帰り頂く。その一連の行為を通して家族や親族の安全や安心、集落の結束や存続を獲得していく祭であると位置付けられよう。また 祭りで使うことを予測して、野菜を育て漬物を作ることから、住まいの新築、修繕や畳替えまで、将来の具体的な人生設計を思い描きながら生活することは、人々に生き甲斐や進むべき方向性を示していると思われる。

一方で小俣地区でみられるように、文化財指定のために報道関係者、見学者が増えることとなり、それも取り込みつつ祭礼の形が作られ、大歳座敷が舞台となるような新しい空間作り、すなわちオモテやナカノマの広さを6畳から7畳半に広げ、廊下をオモテとナカノマの2間の回りに設ける改造も、祭礼のための一事業として行なわれるようになった。お笑い講型とも言うべき舞台を持つ住居が作られていきつつあるのである。

祭礼が時代の変化とともに形を変える中で、住居も新しい形が生まれている。人々が大歳祭を継承するために、知恵をしぼり工夫を試みているのである。祭礼が住居の中で行われることにより、絶えることなく繰り返されていく祭りとともに、人々は住まいの中にあって日々の暮らしを充実したものとして実感できるのではないかと考える。

[注]

- 1) 田中久夫『祖先祭祀の研究』弘文堂 1979.
坪井洋文『神道の神と民俗的神』未来社 1989.
藤原修『田の神・稲の神・年神』岩田書院 1996.
白石昭臣『農耕文化の民俗学的研究』岩田書院 1998.
にいなめ研究会『新嘗の研究』田中宣一「稲種子の授受、交換」第一書房 1999.

[文献]

- 今和次郎, 1958, 「住居の変遷」『日本民俗学大系 第6巻 生活と民俗 I』平凡社.
大河直躬, 1986, 「仏壇のなりたち」『住まいの人類学』平凡社.
山口県文書館, 1964, 『防長風土注進案 第14巻 小郡宰判』.

所属：山口県立大学非常勤講師

E-mailアドレス：kanaya@mx51.tiki.ne.jp